|  |
| --- |
| 取組みテーマ  （６）組織の中での個別支援計画づくり  ～医療型施設において医療的ケアのみならず生活全体を考えたサービス提供への取組み～ |
|  |
| １　施設種別 |
| 医療型障がい児入所施設（旧　肢体不自由児施設・重症心身障がい児施設） |
| ２　概要 |
| これまで、個別支援計画書作成の中で医療的ケアが少ない利用者に対しても、医療面の優先順位が高く設定されていた。それに伴い、記録についても医療面が多く記載され、生活面がなかなか見えにくい状況であった。サービス改善支援員の訪問でこれまでの個別支援計画書、記録の記載内容について見直すきっかけとなり、利用者により安全で楽しく生活をしていただくように取り組んでいる。 |
| ３　取組み前の状況・課題 |
| 当法人は医療と福祉の機能を兼ね備え、制度に関しても、医療法、児童福祉法、障害者総合支援法、その他諸法令の趣旨に従い支援を行なっている施設である。利用者の多くは、重度の障がいがあり、医療的ケアを必要とされながら日々生活を送っている。そのため、個別支援計画において生活を中心に考えなくてはならない方にも医療的ケアに課題がおかれることが多く、生活全体としてのとらえ方が不足していることがあった。  個別支援計画書、記録について記載内容を見直し、医療的ケアのみならず、その方の生活全体を考えサービス提供を行うことが課題であった。 |
| ４　取組み経過 |
| 昨年度にサービス改善支援員の助言を受け、まず個別支援計画書の見直しから行った。  重度の障がいがあり、医療的ケアが絶対的に必要な方々であるため、医療的な面が主となる計画となっていたが、利用者が安心して楽しく過ごせる環境作りのために医療があると考え、「何を優先するか」・「利用者はどんな生活を望んでいるのか」・「どのような生活が利用者の最善の利益か」・「家族はどうか」を念頭におき計画書の作成を行うようにした。  次に、モニタリング会議（カンファレンス）の内容を検討した。  以前は、会議のレジメに各職種担当者（医師・看護師・介護士（保育士）・PT・OT・ST）が利用者の状態を会議前日までに記入し、記入者がそのレジメを読む形式だった。今回、それをサービス管理責任者（児童発達支援管理責任者）が要約することで会議時間の短縮と情報共有を図り、今後その方の生活のあり方に重点を置いた。会議運営方法の変更時には、レジメ記入方法や会議運営方法でもサービス管理責任者（児童発達支援管理責任者）で違いがあり、なかなか統一が難しかったがサービス管理責任者（児童発達支援管理責任者）間で話し合い共通認識を持つように心がけた。  そして計画の実践に関した記録についても、記録の内容にスタッフ個々の違いがあり、記録内容に偏りがあることを知ることができた。さらに、利用者個々の生活が見えにくいことが多かったため、「誰のため」、「何のため」、「何を記録するのか」また、「どのように記録を残せば情報を共有し、より総合的なチームケアに繋げられるのか」を検討する必要があった。そのため、看護部記録委員に介護療育部（介護福祉士・保育士部門）が参加し話し合いを行なった結果、少しずつだが図のように記録に変化がでてきた。以前は医療的な面が多く記載されていたが、支援計画に基づいた記録や日中の様子が記載される事が増えてきた。しかし、重度の方の記録に変化があまりみられないことや、記録方法の統一が難しいことが今後の課題である。  C:\Users\osaka-drc097\AppData\Local\Microsoft\Windows\Temporary Internet Files\Content.Word\IMG_1772.jpg  以前  図  現在  □部分  以前と比べ、生活上での出来事や支援計画に関係した記録が増えている。   |  |  |  | | --- | --- | --- | |  | サービス改善支援事業訪問前 | サービス改善支援事業の訪問を受けて | | （計画）  個別支援計画 | ・医療的な事項が優先されていることが多い。  ・利用者の全体像がわかりづらい。  ・地域との関わりがわかりづらい。  ・個別支援計画の内容が日々の生活に反映されていない。  ・サービス管理責任者（児童発達支援管理責任者）同士での認識の違いがある。 | ・利用者個々の生活スタイルがわかるように支援計画の立案方法を検討した。  ・利用者個々について、個別支援計画に沿った具体的な方法について話し合いを行った。 |  |  |  |  | | --- | --- | --- | | （記録） | ・利用者の生活が具体的に見える内容の記載が少ない。  ・医療的ケアの実施内容の記載が多い。  ・次の支援に繋がるような内容や目標に沿った内容の記載が少ない。 | ・生活面がわかるような記録方法の見直しを行なった。  ・多職種との情報交換や連携が取れる方法を検討した。 | | （実践） | （**モニタリング会議）**  ・カンファレンスの内容が経過報告に重点がおかれていた。 | （**モニタリング会議）**  ・カンファレンスでの検討内容については、経過報告に重点を置くのではなく、今後、生活を中心としたサポートをどのように行うかに重点を置き、話し合いを行うようにした。 | |  | **（スタッフ教育）**  ・スタッフ一人一人の自己研鑚としての研修を実施した。「看取り」や「重症心身障がい児・者の生涯発達」「重症心身障がい児・者の将来像について」など |   【経過】 |
| ５　施設の振り返り・感想 |
| 全体の課題として、利用者と地域が交流できる機会を設け、利用者が望むのであれば在宅移行への支援も視野に入れた個別支援計画を作成する必要がある。そのためには、地域生活を支える在宅サービスや日中活動等の充実を図り、当法人の理念でもある「私たちは障がいを持つ人々が地域において安心して生活できるよう支援します」をより強く進めていく事が課題である。  今回、サービス改善支援員の助言により、利用者がどのような毎日を過ごしたいのか、５年後１０年後はどうかなど、その人の生涯についてスタッフ全体で考えるようになった。利用者・家族・スタッフが共に考えながら、個別支援計画書を作成し、それに基づいた記録に努めることで利用者個々のQOLの向上に努めていきたいと考える。 |

**説明: C:\Users\KodamaR\AppData\Local\Microsoft\Windows\Temporary Internet Files\Content.IE5\ZUUHU4T3\MC900405972[1].wmfポイント**

・医療的ケアを必要とする施設において、生活全体を考えたサービス提供に向けて個別支援計画、記録、会議について取り組んだ事例である。

・医療型施設においては、必要な医療的ケアに重点がおかれるところであるが、利用者がどんな生活がしたいか、5年後、10年後の生活を考えて今どのような個別支援計画を立てサービス提供していくか、これまで以上に生活の視点を取り入れ、実践されている。

・福祉職だけではなく医療職を含め多職種の職員が生活全体について情報共有をめざした組織としての取組みは、利用者を生活主体として捉えた大変参考になる取組みといえる。